

[社 会]

多様な人の現状を踏まえて社会への関わり方を選択・判断する 児童を育成する小学校社会科授業

－第4学年「ごみはどこへ」の実践を通して－

栗田 明典*

1 主題設定の理由

小学校学習指導要領において、社会科における思考力、判断力は、「学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する力」とされる。さらに、「習得した知識などの中から自分たちに協力できることを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして、判断する」とある。第4学年のごみの処理の学習では自分にできることを考え、ごみ削減に対して協力する態度を養う実践が行われることが多い。教科書でも、分別や3R、買い物の仕方などが事例として取り上げられている。筆者の実践を振り返っても、児童に個人が取り組むことを選択・判断させることが多かった。ごみの処理の学習では、児童が社会への関わり方を自分事として考えることで思考力や判断力を育成することに寄与できる反面、「ごみは削減すべき、分別すべきだから自分もする。」などの道徳的な判断に陥る可能性もある。また、「ごみを分別しない。リサイクルより捨てた方がいい。」といった判断が受け入れられるのかという疑問も残る。既にすべきことが決まっている取組の中からどの取組をするのかを選ぶ選択・判断では、思考力や判断力は育成できたとしても、よりよい社会¹⁾を目指す国家や社会の形成者を育成できるとは思えない。

ごみの処理の学習において、よりよい社会を目指した実践に宮下(2020)がある。宮下は、持続可能な社会を目指し、単元末に社会の在り方を価値判断し自分にできることを意思決定する学習により、学習者が自らの規範を問い直し持続可能な社会を方向付けると述べている。一方、社会科入門期の学習者が社会を認識することの難しさに言及している。この言及に対して由井蘭(2017, p.38)が示唆に富む。由井蘭は、みんなが幸せになるためにはどうしたらよいか考え続けるには、社会的事象を「人のいる風景」としてじっくりと見つめる時間を確保し、自分たちの問題を発見させる力を育てることが必要と述べる。筆者の社会科入門期の実践でも、価格、設備、きまりなど社会の仕組みを資料として示しても、最終的には見学などで人と関わって得た認識を根拠にする児童が多かった。さらに、よりよい社会を目指し、人を取り上げて学習を進めるならば、中平ら(2016)が述べる、「意思決定の過程からこぼれ落ちる人、異なる他者について思いを巡らせる」ことが重要である。道徳的な判断に陥らず、よりよい社会を考えた選択・判断をするためには、社会に存在する様々な人の思いや願い、困り感について考えた上で、社会への関わり方を選択・判断する必要がある。

そこで、ごみの処理の学習において第4学年の児童が、社会に存在する様々な人の現状を踏まえて社会への関わり方を選択・判断する力を育成するには、どのような学習の工夫が有効か実践を通して明らかにする。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、ごみの処理の学習で児童が多様な人の現状を踏まえて社会への関わり方を選択・判断するために、どのような学習の工夫が有効か実践を通して考察することを目的とする。本研究では、ごみ処理に関わる人を4つの立場から取り上げる。

【立場1】 ごみ処理の仕事をする人(ごみ収集車、クリーンセンター、資源物リサイクルセンターなどで働く人)

【立場2】 柏崎のごみのきまりや仕組みを考える人(市の環境課の人)

【立場3】 ごみの分別のきまりに従い分別できる人(現状のごみの分別を肯定的にとらえる市民、保護者)

【立場4】 ごみの分別のきまりに従いたいのが困難な人(一部の高齢者、体の不自由な人、日本語を読むことが困難な人)

なお、児童が多様な人の現状を踏まえて社会への関わり方を選択・判断するとは、複数の立場の考えや思いを根拠として社会への関わり方を選択・判断している姿とする。

*柏崎市立大洲小学校

(2) 研究の方法

ごみの処理の学習において、ごみ処理に関わる人を4つの立場から認識するため、①2種類の課題設定、②関わる人の可視化、③関わる人との直接交流という3つの工夫を実践し、児童の判断の根拠を分析する。手順として先ず、全体の傾向を導き出す。その中から複数の立場の考えや思いを根拠とした児童と、1つの立場の考えや思いを根拠とした児童を抽出する。抽出児の学習の様子や聞き取り調査から、どの工夫が効果的だったか分析し、3つの工夫の有効性について考察する。

(3) ごみ処理に関わる人を認識する3つの工夫

① 2種類の課題設定

現状の社会の仕組みを認識する1つ目の課題「なぜ、柏崎市はこんなにたくさんごみの分別をしているのか。」を追究した後、社会への関わり方を選択・判断する2つ目の課題「柏崎市のごみの分別はこんなにたくさん必要か。」を考える。社会への関わり方について、唐木(2019)は、自分にできることを問う場合もあるが、社会に見られる課題の解決にどのように関わっていくかについて考え始めるというのでもよい、と述べる。唐木の考えを基に、1つ目の課題追究を通して柏崎市のごみ処理の仕組みや関わる人の現状を認識した後、柏崎市のごみの分別に見られる課題を見出し、2つ目の課題を設定する。2つ目の課題は、ある立場にとってはよいが別の立場から考えると困るという問題を抱えている。児童はどの立場に立つか考える中で、多様な人の現状を踏まえた選択・判断をすると考える。

② 関わる人の可視化

毎時間の授業で、ごみ処理に関わる人が現在どのような思いをもっているか、関わる人の思いや願いを吹き出しなどの資料として提示する。また、児童が調べたり作業したりして見付けたごみ処理の仕組みを板書で構造化する。その板書にどんな人が関わっているか「人マーク」を貼ることで、関わる人を可視化する。さらに、自分は何をしているか板書に位置付けることで、自分もごみ処理に関わっていることに気付かせていく。

③ 関わる人との直接交流

ごみ処理に関わる人4つの立場の人と直接交流を行う。まず、【立場1】ごみ処理の仕事をする人について、クリーンセンターの見学を行い、ごみ処理の仕組みや働く人の思いを調べる。次に、【立場3】ごみの分別のきまりに従い分別できる人について、保護者へのインタビューを通して、柏崎市のごみの分別に対する考えを調べる。その後、【立場4】ごみの分別のきまりに従いたいのが困難な人を支援する地域のコミュニティセンター長に地域のごみ分別の実態について話を聞く。最後に、【立場2】柏崎のごみのきまりや仕組みを考える人について、市の環境課の人に児童が自分の考えを伝え、それに対し行政の立場として思いや願いを話してもらう。柏崎市のごみ処理をする人やごみの分別に肯定的に取り組む人を認識した後、それには困難な人の存在を認識し、両者の存在を踏まえて児童が考えたことを行政に伝える。

4つの立場の人と直接交流することで、どの立場にもそれぞれ思いや願いがあることを知ることができるであろう。その経験をもとに、2つ目の課題解決を図ることで、児童は多様な人の現状を踏まえた選択・判断をすると考える。

3 実践の実際

(1) 単元名 ごみはどこへ

(2) 研究対象 第4学年14名(男子10名, 女子4名)

(3) 単元計画 (全16時間)

	学習過程	学習活動(時間)
1次 (12h)	課題1の 設定(2h)	・柏崎市のごみガイドブックを見ながら、ごみを分別する。(1) ・新潟県の各市町村のごみの分別数を地図に表し、気付いたことを基に「なぜ、柏崎市はこんなにたくさんごみの分別をしているのか。」という社会の仕組みを認識する課題を設定する。(1)
	課題1の 追究(9h)	・ごみステーションから、どこに、誰が、ごみを運んでいくか調べて、地図にまとめる。(1) ・クリーンセンターの仕組みを調べ、燃やすごみは誰がどうやって処理するかまとめる。(1) ・最終処分場の設備や役割を調べ、ごみはお金をかけて衛生的に処理することをまとめる。(1) ・資源物の処理について調べ、集めた資源物はどうなるか図にまとめる。(1) ・ごみ処理に関わる人の思いや願いを示す資料を比較し、働く人の気持ちを考える。(1) ・クリーンセンターを訪問し、施設の様子を見学したり働く人にインタビューしたりする。(2)

	課題1の 追究(9h)	・ごみの有料化によりごみの排出量が減ったことを資料から読み取る。(1) ・プラスチック包装やフードロス事例に、大量生産、大量消費の現状を調べてまとめる。(1)
	課題1の 追究(1h)	・なぜ柏崎市はごみの分別数が多いのか、学習内容を基にまとめる。(1)
2次 (4h)	課題2の 追究(1h)	・廃棄物に関する市民アンケートから分別が困難な人の存在を調べ、「柏崎市のごみの分別はこんなにたくさん必要か。」という社会への関わり方を選択・判断する課題を設定する。課題について話し合い、1回目の判断をする。(1)
	課題2の 追究(2h)	・保護者インタビューの結果をまとめ、大人は柏崎市の分別をどう考えているかまとめる。(1) ・コミュニティセンター長からごみの分別が困難な高齢者の実態について話を聞く。(1)
	課題2の 選択・判断 (1h)	・市の環境課の人に自分の考えを伝え、意見交換をする。2回目の判断をする。(1)

(4) 実践の概要

① 2種類の課題設定について

第1時、教師が用意した数種類のごみを、柏崎市のごみガイドブックを見ながら分別した(写真1)。45分では正しく分別できず、授業を延長して分別を続けたことで、「分別は大変だった。」「疲れた。」といった感想をもった。第2時では、県内の市町村別分別数を地図に表し、柏崎市が県内で最も多くの分別数であることを調べた。第1時の経験をした児童からは、「こんなにたくさんの種類を分別するは大変だよ。何で柏崎市はこんなに多いのかな。」という疑問が浮かび、1つ目の課題とした。



写真1 第1時のごみの分別の様子

この課題に対し、調べ学習やクリーンセンターの見学を通して学習したことを基に、第12時で1つ目の課題解決を行った。児童は、「ごみによって処理の仕方がちがうから分別する。」「分別をきちんとしないとごみを処理する人の仕事が増える。」「細かく分別しないと正しくリサイクルされない。」などと発言した。このように、ごみを処理する立場【立場1】からまとめた。振り返りでは、「細かく分別しないといけないことが分かった。」「家で、きちんと分別したい。」という記述が多く見られた。

第13時、ごみを分別する立場の資料として、柏崎市の廃棄物処理に関する市民アンケートを取り上げた。多くの人が【立場3】が分別の仕方に肯定的な反面、高齢者や日本語が読めない他の国の人など困っている人【立場4】がいることに気付いた。分別するべきと思っていた児童の中に、「このままでいいのかな。」「他の市町村みたいに分別の数を減らしたらいいんじゃないか。」と話す児童が出てきた。そこで、「柏崎市のごみの分別は、こんなにたくさん必要か。」という2つ目の課題を設定した。引き続き課題に対して思ったことを全員で話し合った後、1回目の判断を行った。第14次で保護者インタビュー、第15次でコミュニティセンター長の話、第16次で柏崎市の環境課の人との直接交流を通して、4つの立場の人の置かれた現状や思い、願いなどを認識した。その上で、2回目の判断を行った。

② 関わる人の可視化について

ごみ処理の仕組み、大量消費社会の現状など、1次の社会の仕組みを認識する授業は、図1の展開で行った。毎時間、地域の副読本の記述や筆者の聞き取り調査から作成した働く人の思いを、吹き出しなどの資料で提示した。さらに、第7時に働く人の思いに関する資料を比較した。振り返りでは、「ごみを処理するために働く人は、分別をしてほしいと思っている。」「わたしたちがちゃんと分別しないと働く人は困る。」などの記述が見られた。学習の流れ5の場面では、「どこに人が出てくる?」と発問し、調べたことをまとめた板書の中で人が関わっている箇所に「人マーク」を貼った(写真2)。児童は始め、ごみ収集車やクリーンセンターで働く人といった直接ごみ処理に関わる人しか見付けられなかった。しかし、授業が進むにつれて、分別のきまりを考えた人、ごみ処理に使うお金を払う人、ごみ袋を作っている人、など様々な人の存在を気付くようになった。振

1. 本時の問いを提示
2. 予想を立てる
3. 問いについて調べる
4. 調べたことをまとめる
5. 関わる人の可視化
6. 自分の立場の可視化
7. 振り返り

図1 1時間の学習の流れ

り返りでは、「ごみの処理は機械がしているけど、人が操作しないとイケないことが分かった。」「ごみの処理について、ほとんどのことは誰かがしていることが分かった。」「お金を払っているのはもしかしたらお父さんたちかもしれない。」などの記述が見られた。

③ 関わる人との直接交流

第8時と第9時、1つ目の課題を追究するためにクリーンセンターの見学を行った。施設の説明を聞いたり、授業で生まれた問いを質問したりした。有害物質を出さず環境に配慮して処理していること、熱い砂を使い効率的に燃やしていること、24時間交代しながら働き安全を確かめていることなど、処理の仕組みと働く人の思いを調べた。特に、ごみの分別をきちんとしない人がいてスプレー缶が爆発したことがある、という話を聞いて「分別をしないと働く人が危険になる。」と振り返る児童が多かった。

2次の最終時である2つ目の課題追究の場面では、保護者、コミュニティセンター長、市の環境課の人との直接交流を行った。「柏崎市の分別は県内で一番種類が多いが、大変かどうか。」一人一人が自分の保護者にインタビューした。結果、「分別の仕方に慣れたから大変じゃない。」という保護者が半数以上であった。第1時で分別の大変さを実感している児童にとって意外な結果だった。一方、「自分は大変じゃないけど、体の不自由なお年寄りのことを考えると少し減らしていいかも。」「大変だから種類を減らすのもいいし、そもそもごみを増やす原因になるいらぬ包装を減らせるといいね。」などの回答もあり、これまでの学習で形成してきた認識を深められた。コミュニティセンター長からは、地域のごみの高齢者で分別したくても体が動かなくてできない人がいること、代わりに自分が分別していることなどを聞き、自分たちの住む地区にも分別で困っている人がいることを知った。

市の環境課の人にはごみの分別に対する児童の意見を聞いてもらい、感想や考えを話していただいた(写真3)。日本語が読めない人に対しては、外国語版のガイドブックを作ったり、説明会を開いたり、個別に相談にのったりしていること、高齢者に対しては出張ごみ回収をしていることを説明してもらった。児童は、ごみの分別に困っている人に対して、市が対策を講じていることを知った。

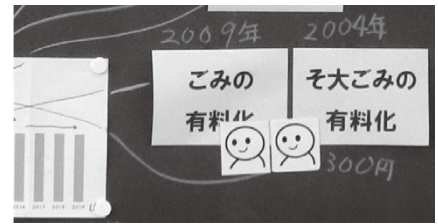


写真2 「人マーク」の活用例 (第9時)



写真3 市の環境課の人との交流

4 実践の分析

(1) 全体の分析

本單元における最終的な判断である2回目の判断(第16時)の根拠を対象に、複数の立場の考えや思いを課題2への根拠としているかどうか、という視点で分析する。

1回目(第13時)と2回目の判断の根拠を比較する1回目に複数の立場を根拠にした児童は2名であったのに対し、2回目は11人であった。第14時から第16時でごみ処理に関わる人と直接交流した後の2回目の判断では、複数の立場を根拠とする児童が増えた。

次に、2回目の判断で、どの立場から根拠を考えたのかまとめたものが表1である。【立場4】の考えや思いを根拠にした児童が最も多い。これらの児童は、ごみの分別に困難な人にとって現状の柏崎市の分別の仕組みでよいかよくないか、という点を論点としていた。肯定派は、「ごみの処理をする人が無駄な仕事をしないで、安全に働くため。」「分別したごみがきちんとリサイクルされるため。」など、効率的なごみ処理を重視して判断した。一方問い直し派は、「今の市のやり方では高齢者にはまだ大変。」「年をとって体が動かなくなると今の分別はできないと思う。」など、主に高齢者の困り感を重視して判断した。

表1 2回目の判断の根拠に記述された立場

判断	児童	ごみ処理に関わる人の立場				その他
		1	2	3	4	
現状を肯定的に判断	ア		○		○	
	イ	○			○	
	ウ	○	○			
	エ	○	○			
	オ	○			○	
	カ				○	○
	キ				○	○
	ク		○		○	
現状を問い直す判断	ケ		○			
	コ	○			○	
	サ		○		○	
	シ			○	○	
	ス				○	
セ				○		

注) その他は、環境面、法律面を根拠とした。

(2) 抽出児童の分析

複数の立場を根拠とした児童2名と、1つの立場を根拠とした児童1名を抽出し、判断の根拠の分析を行う。

① 児童ア（複数の立場を根拠とした児童）

児童アは、資料を読み取る力や事象を関連付ける力が高く、ごみ処理の仕組みを正しく認識し、働く人の思いに寄り添いながら単元の学習を進めてきた。「ごみを処理する人が分別してほしいと言っているから、わたしは分別したい。」

（第7時の振り返り）というように、働く人の願いを素直に受け入れる反面、現状を問い直したり、現状に疑問を抱いたりすることは苦手である。児童アの1回目と2回目の判断と根拠は、次の通りである。

（1回目）「現状を肯定的に判断」…分別が難しい人【立場4】は、他の人（分別ができる人）【立場3】にしてもらえばいいし、わたしたちが知らないだけで分別をする理由は他にあるかもしれないからです。
 （2回目）「現状を肯定的に判断」…分別をきちんとすれば環境課の人【立場2】が言ったように少しでもリサイクルされて、ごみが減るからです。英語、韓国語、中国語のガイドブックがあるなら外国から来た人【立場4】も困らないし、お年寄り【立場4】の支援は難しいけれど、ごみを運ぶ支援をすればだいぶ楽だと思うからです。それよりも、プラスチック製品を少なくしたり、なるべく買わなかったりすればいいと思います。

児童アは、市が対策をしていることを重視し、現状を肯定的に判断するとともに、ごみを出し続ける社会の仕組みの問題点を指摘している。児童アへの聞き取り調査では、「ごみになるプラスチックの包装をできるだけ少なくした方がいい、というお母さんの考えが一番いいと思った。そもそもごみになるものが減れば、分別は大変じゃなくなると思う。」と答えている。児童アは授業で学習したことを家庭で話し、インタビューをしてきたという。児童アは母親の言葉から、現状を改めて考え直して、大量生産、大量消費の社会の仕組みが問題の根本であることを判断の根拠としていた。

② 児童サ（複数の立場を根拠とした児童）

児童サは自分の考えを文章で書く力が高く、授業で分かったことや思ったこと、意見や疑問などを毎時間振り返りに書きながら単元の学習を進めてきた。「肉や魚はトレイを使わず、袋詰めの方がいい。理由は…」（第11時の振り返り）と、考えと根拠を普段の学習から書くことができる。児童サの1回目と2回目の判断と根拠は、次の通りである。

（1回目）「現状を肯定的に判断」…外国人や老人の人々【立場4】もかわいそうだったけど、分別をしないとスプレー缶が爆発したり、ごみの処理に時間がかかりすぎたりして、働く人【立場1】が大変だから。
 （2回目）「現状を問い直す判断」…やっぱりお年寄りや外国の人【立場4】が大変だから、2、3個くらい分別の数を減らしたらいいと思う。市役所の人【立場2】もこれから分別の仕方を考えていこうと言っていたので、ほくは今のままでなくていいと思いました。

児童サは、ごみの分別に困っている立場を根拠とした。児童サへの聞き取り調査では、「お母さんと学校で習ったことの話をして、ごみの分別について一緒に考えた。お母さんは、自分は分別するのはそんなに大変じゃないけど、困っている人がいるなら少しは分別の数を減らしてもいいかもしれないねと言っていた。困っている人のことを考えて決めた。」と答えている。また、「市の環境課の人に僕の意見を伝えて話をした時、「柏崎市には今の分別の仕組みに色々な意見が寄せられている。だからこれからも分別の仕組みを考えていきたい。」と答えてくれた。」と話した。児童サは、母親や市の環境課の人と直接話をする中で気付いたことを判断の根拠としていた。

③ 児童ケ（1つの立場を根拠とした児童）

児童ケは、問いに対し時間をかけて考え、事実を根拠にいいか悪いか比較的是っきりと判断する傾向がある。本単元でも「ごみ袋の値段は上げない方がいい。」（第10時の振り返り）というように、自分の考えを振り返りではっきりと記述してきた。児童ケの1回目と2回目の判断と根拠は、次の通りである。

（1回目）「現状を肯定的に判断」…分別したごみをリサイクルする時、加工の仕方が違う。分別しなかったら工場の人【立場1】が困る。
 （2回目）「現状を肯定的に判断」…市役所の人【立場2】が分別したらごみが減ると言っていた。分別しないでたくさんごみを燃やす処理をすると、二酸化炭素が出るから。

児童ケは、ごみを処理する立場の考えや処理の仕組みを根拠とした。児童ケへの聞き取り調査では、「市の人の話で、分別することは環境にもいいと教えてもらった。環境をよくすることは誰にとっても大切だから理由にした。」と答えている。児童ケは市の環境課の人との直接交流で教えてもらったことを判断の根拠としていた。

5 実践の考察

(1) 3つの手立ての有効性

① 2種類の課題設定

全体の分析より、全ての児童が単元の学習過程で認識したことを判断の根拠としていた。抽出児の分析より、複数の立場を根拠に判断した児童アと児童サは、保護者インタビューが判断に大きな影響を与えていた。2人とも保護者インタビューの際、1つ目の課題解決の中で学習したことを家庭で話し、それを基に保護者から話を聞いている。1つ目の課題解決の過程でごみ処理の仕組みや人の思いなどを認識したことが、保護者インタビューを通じて2つ目の課題解決の根拠に生かされている。以上より、2つの課題設定が複数の立場から判断することに有効とはいえない。しかし、現状の社会の仕組みを認識してから判断することで児童は社会的事象を根拠として社会への関わり方を判断しており、道徳的な判断に陥りにくいと考える。

② 関わる人の可視化

全体及び抽出児の分析から、関わる人の可視化が複数の立場から判断することに有効かは判断できない。ただし、授業では、社会的事象に人が関わっていることや自分が社会的事象にどのように関わっているかなど、関わる人がたくさんいることは認識されていく様子が見られた。

③ 関わる人との直接交流

複数の立場から判断した児童アや児童サは保護者インタビューが主な判断の根拠となっていた。児童ケは市の環境課の人との直接交流が判断の根拠となっていた。直接交流で形成した認識は児童の判断の根拠になりやすいと考える。さらに、児童アや児童サは直接交流において、話を一方的に聞くのではなく、一緒に話をしたり質問したりと対話をしていった。これに対し、児童ケは市の環境課の人に教えてもらうだけであった。複数の立場を根拠として判断するには、関わる人と直接交流する際、相手との対話が有効だと考えられる。

(2) 本研究で得られた知見と今後の課題

① 得られた知見

- ・道徳的な判断に陥らないために、現状の社会の仕組みを認識する課題を追求した後、社会への関わり方を選択・判断する課題を追求するという順で課題解決学習を行うことが効果的な方法の1つである。
- ・第4学年の発達段階では、社会的事象に関わる人との直接交流で得た認識が児童の選択・判断の根拠になりやすい。
- ・直接交流で児童が考えを伝えたり共に話し合ったりする対話を行うことが、児童の判断の根拠として使われる認識となる可能性が高い。

② 今後の課題

- ・記述された文章だけが児童の考えの全てとは限らない。記述に表れない思考も分析の対象にする必要がある。
- ・本単元の2つ目の選択・判断する課題は、ごみの分別の制度に対する可否の判断で終わっている。そのため、【立場4】のような現状に困難を抱える人を根拠としなくてもよい課題であった。社会にみられる課題を見出し、関わる人の現状を認識し、解決策を検討するという学習過程であれば、多様な人の現状を踏まえて考えるであろう。発達段階や児童の生活経験等を踏まえ、課題の内容の検討をしていきたい。

注 1) 筆者はよりよい社会を、ある地域で行われる取組がその地域に住んでいる誰ものこととして考えられ、誰もが意見を言ったり参加したりすることができ、安心して生活し続けることができる社会と捉えている。

参考文献

- 唐木清志「「リアルな問い」を設定するための五つの条件」『社会科教育』56巻10号、明治図書、2019年、pp.8-11
- 中平一義、栗田明典、宮下祐治、松本啓介、渡邊正吾、室井章太「異なる他者への認識を促す社会科授業開発研究」『上越社会研究』第32号、上越教育大学社会科教育学会、2017年、pp.45-62
- 宮下祐治「ESD構成概念を取り入れた社会科の実践－小学校第4学年単元「廃棄物の処理」－」『教育実践研究』第30集、2020年、pp.43-48
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版株式会社、2018年、pp.22-23
- 由井蘭健『一人ひとりが考え、全員でつくる社会科授業』東洋館出版社、2017年、p.177